

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

# <インタビュー> 山田太一氏へのインタビュー（3）：怪談・怪異譚・不思議譚をめぐって

著者	三浦 正雄, 馬見塚 昭久
雑誌名	埼玉学園大学紀要. 人間学部篇
巻	17
ページ	359-362
発行年	2017-12-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1354/00001110/">http://id.nii.ac.jp/1354/00001110/</a>



## インタビュー

### 山田太一氏へのインタビュー（3）

— 怪談・怪異譚・不思議譚をめぐって —

#### Interview with Taichi Yamada (3)

About Tales of Ghosts and Strange Phenomena

質問 三 浦 正 雄・馬見塚 昭 久

MIURA, Masao MAMIZUKA, Akihisa

回答 山 田 太 一 氏

（承前）科学文明の進歩は、様々な利便性ととともに、実は進歩ではなく破滅を引き寄せている。そうした状況の中で現在なすべきことは、時間をかけて物事を行うことに価値を見出すことではないか。

山田）のろいもの、遅いものに利を探し出すことが、僕はひとつ今の社会のやるべきことかな、と思いますね。簡単にできるわけにはいかないけど。僕だって、便利がいいと言うことが大いにありますから。でも、本屋が衰退してきましたでしょ。出版社もだめになって、作家も食えなくなってきて、そういう時代ですよ。良い文学もだんだん埋もれて、出てこなくなるんじゃないかな。それとも、もっと辛くなって良い文学が書けてしまうのかな。音楽だって、アメリカの作家が書いていたけど、この頃はレコード屋に行っても楽しくないと。

○CDも売れなくなっちゃってますね。

山田）ええ、本屋と同じですよ。本って感触がいいし、装丁とか活字の大きさとか、付随しているいろんな感受性育てているのに。みんなコンピューターで間に合うようになってしまう。電子書籍は、見た限りでは全部姿が同じじゃないですか。それ

はね、文化の衰退だ、と思うんです。

○電子書籍には、デザインなんか、ないですからね。

山田）本屋には、目指した本がなくても行くじゃないですか。あつ、こんな本が出ているんだとか思いがけない本を目にして世界が開けていくということがあつ、コンピュターというのは狙いを定めてそれをというふうになるから、それしか手に入りませんね。

○やはり効率重視ですね。

山田）僕には、ずっと探している本というのが数冊あるんですよ。神田あたりを歩いているとき、さしせまって考えているわけではないけれど、あの本はどこかにないかなとか、考えながらうろろするわけですよ。大抵その本はないんだけど、あの物を買っちゃうんですね。そういう楽しみというのが、本にはありますからね。アマゾンに頼んだこともあるんですが、あつという間に手に入ってしまったら味気なくて。なかなか手に入らないプロセスを楽しんでいたんですね。ですから、僕はそれ以後、アマゾンには頼みません。本屋に行

キーワード：山田太一、怪談、怪異

Key words : YAMADA Taichi, ghost story, strange phenomena

く必要もなくなってしまうし。僕は、逆らって、ワープロやなんかも使いませんし、原稿用紙に鉛筆で書いてますけど。今は異様な人間を見たような顔をされますけど……。

○ところで、先生の御編集になった『不思議な世界』<sup>1)</sup>という本も大変面白く拝読致しました。

山田) 僕はアンソロジーは何冊か筑摩から出しましたけど、みんな楽しかったです。『生きる悲しみ』<sup>2)</sup>というのが一番ずっと売れていますけど。

要するに、私たち人間は限界だらけの中で生きているんですね。その悲しみを感じ取るということが大事なんであって、平等だとか何だとかは、権利としてはわかるけど、僕らは生まれたときから個別を生きていますよね。生まれた日を選べないし親を選べない、あらゆることを選べない、兄弟、国も選べない。限界だらけで、一人の人間を生きています。

それなのに、限界がないみたいに、一本の線で同じくらいの人をよーいドンで走らせて、誰が速いかな、なんてむちゃな話だ、と思うんです。その人のせいでも何でもないんだけど、ラッキーな人とアンラッキーな人がいるわけです。目の前の人を見れば、それぞれ違いがあり、限界がある、それがないような顔をして生きようとするという生き方は、とても変な異様なことだ、と思うんです。

違いがこんなにあるんだということを、むしろ楽しんで、苦しんでも悲しんでも、結局、人間の底流にはいつも悲しみがあると思うんですね。その限界の悲しみに対して、お互いにある共感がある。全員が平等で、その人が幸福になるかどうかはその人の努力次第なんて言うのはとんでもないことで、そんな非リアリズムなことを言われても困っちゃう、と思うけど、何となくそういう考え方が多いですね。

○先生は、『リリアン』<sup>3)</sup>という絵本も出されていますね。この中に出てくる人形の女の子は、なぜ動いたり話したりできるのでしょうか。子どもの

自由な発想だという見方もできますが、人形にも意志があるという見方もできます。先生が、この本で描こうとされた生命観はどのようなものなのでしょうか。

山田) 子どもってね、あまり大きくなっちゃったらそうでもないでしょうけど、例えば、指人形で「こんにちは。」なんて言うのと、すっかり生きていると思っちゃいますよね。全部人間が操作しているわけですけど、子どもは本当に存在しているように受け取ってしまう。実もふたもないことを言えば、人形師が子どもを楽しませたというだけですけども、その種明かしは、学校に入って一年生になってから、それは人形だったんだと言われてしまうという、という話なんですけど、その辺合理的な説明はない方がいいんですよ。

江戸川乱歩の作品だって、子供の頃は、本当に怪人二十面相なんかがいるような気がしているわけですよ。だけど、ある程度の年になると、あれはお話だったんだと気がつく。そういう風にして段々大人になっていくと思うんです。その大人になっていくまでのお話です。

この場合には、仲のいい友達が死んでしまったということがあるんですが、それで、その友達以外は自分の世界に入れたくないと言って輪を描いて、中に閉じこもってしまう。それを壊して、女の子が中に入ってくるわけです。要するに、幼年期が壊れていく、そしてむき出しの現実が最後には出て来てしまう。

○子どもにしか見えない世界、真実というものがきっとあるんでしょうね。

山田) そうですね。幼児だったら、簡単に非現実を信じちゃいますよね。我々も手品なんかで簡単に騙されちゃいますよね。何が現実かわかりませんね。

○『異人たちとの夏』<sup>4)</sup>に戻りますけれど、さっきお父様の件でお話してくださったんですが、他に幽霊の恋人が出てきますよね。このケイは、ど

のように造形されたんでしょうか。

山田) 生身の女の人が、有り得ない親との交渉の中にのめりこんでいく自分の目を覚まさせてくれるということだったら、普通の話になっちゃうでしょ。要するに、幽霊の親との交渉は、自分がどうかしていたんだということになっちゃうから。読む方も、死んだ親との交渉なんてあるわけないと思って読んでくださる。ああ、これは幻想だったんだと気がつかせる役割が、ケイという恋人に、普通の話の構造だったらあるわけです。ところが、気がつかせる役割の人間もあり得ない存在だったんだ、という風に書いたんですよ。その結果、あの時、君はどうかしていたんだ、と友達と言うんですけど、自分はどうかしていたとは思えない。かなり強引かもしれないけれど、最後まで、密かに、その体験はすべて自分の幻想だったとは思わないんだと。勝手にそう思っているだけで、いまの科学で見ればありえないんですけど、だからこそ小説なんです。

死んだ者に対する感度というのは、どんどん無くなりますね。それは今に限らずだけでも。恐ろしいスピードで、死んだ人というのは忘れられますね。忘れないと思っていても、本人がいなくなると、勝手な物語にしちゃう。勝手な物語にしても、そういうものを感じる力って、死んだ人を感じる力ってのは、人間の大事な感性だと思うんです。でないと、現在と未来でしか僕らは生きていないことになってしまいます。だけど、事実としては、僕らは、過去の恩恵で生きているようなところがありますね。着るものだって何だって、すべて過去の人が作ったもの、発明したもので生きているわけだから。

生きている感覚としては、死んだ人や過去なんてないかのごとく、現在と未来しか見ていないようなところがあるんだけど、過去をよみがえらせる感性というものが、必要ではないか。津波でたくさんの方が亡くなって、一般的には元気になろうって言いますよね。でも、あれだけたくさんの方が亡くなって、傷がないわけないと思うんですよ。元気になろうとか、絆をとかいうことで、死者を忘れることで回復させようとする。でも、

当事者は、人にそんなことは言えないけど、そんなに早く個々の悲劇は忘れられないと思うんです。僕は津波に遭ったわけではないのでえらそうなことは言えないけど、それぞれまだものすごい過去を抱えているんじゃないかと思うんですね。それも尊重する、大事にするっていうこと。他人がなかなか大事にしないから、本人たちが大事にすればいいと思うけど。変化が速すぎるから、過去に対する感度がどんどん悪くなっているように感じます。

経済的効率がいいとか、儲かるとか、そういう基準で皆が考えすぎているんじゃないかと思うんです。結局、経済的にこっちの方がいいんだ、と言われると反論しにくいでしょ。新・国立競技場のことだって、結局お金のことを言っているじゃないですか。まあ、一度ご破算は賛成だけれど、儲かるか儲からないかという基準で多くのことが判断されている。津波だって、早く忘れて新しく町を造ることが善だ、ということになってしまう。そりゃ、忘れられてケロリと元気になってくれればいいんだけど、そうはいかない悲しみみたいなものの行方が無くなっていくような気がするんです。人に言う訳にはいかない。でも忘れられない。でも、悲しいんだ、とは言いにくい。

それともう一つは、ああいう災害に遭ったって、全部が悲劇ではないということですか。つながりが負担になっていた人がいなくなってさっぱりした、という人だっているかもしれない。でも、それは言えない。人間って、そういう喜びもある。その喜びを悲しむこともね。それを書くのは、文学、ドラマなのかな。人間って、例えば嫉妬する感情とか、マイナスの感情というのは、全部を拭い去ってはいられないのではないか。普通だったらそんなに嫉妬もないかもしれないけど、ある人については、あいつの方が幸福になったとか、ずっと一生なんとなく無念で後を引いてゆくものだと思うんです。悲しみもまたそうだし、思うんです。たとえば、家族の何人を亡くしましたか、家は半壊ですか全壊ですかとか、物質的なカウントで不幸の度合いを測るじゃないですか。だけど、人間って、亡くなってラッキーと思っている人も含めて、ものすごくいろいろだ、と思うんです。

もっと辛い人がいるのに、あなたは辛さを克服できないのか、あなたはたるんでいるとか、しっかりしてないとか言われたって、その人にとっては、一人しか亡くしていないけど辛い、というのがありますよね。

数では測れない。政治的な部分では、どうにもならない。それを大事に思うのが、広い意味での文学だ、と思うんです。その亡くなった人たちが仮に幽霊としてどこかに出てくるとか、そういう感覚というのも、僕は悪くないと思うんです。だって、悪しき亡霊ではないから。悪霊でもいいんですけど。それでも、過去を意識して忘れないでいるんですから。亡くなった人に対する感情があるだけでも、豊かなことなんじゃないか、と思うんです。

○私が怪談が好きなのは、そういうところにあります。弱者の悲しみや苦悩などが感じられるから、怪談が好きなのです。たいてい弱者なんですよね。無念の思いを抱いて亡くなった人は。

山田) そういう死んだ人の無念を感じ取るような感性が、大切といえば大切ですけど、そんなことをこだわっていたら元気になれないとかいう主張に蹴散らされてしまう。僕は、津波の災害に関しておいに怪談が語られてもいい、と思うんです。あまり聞かないですけど。

○新聞には、何回か出ていました。<sup>5)</sup>

山田) そうですか。当然でしょうね。何もなかったら変ですよ。

○まだまだお聞きしたいこともあったのですが、時間もだいぶ経ってしまいました。今日は、長時間にわたって、貴重なお話をありがとうございました。

山田) こちらこそありがとうございました。

## 注

- 1) 『不思議な世界』 山田太一編、筑摩書房、1993年
- 2) 『生きる悲しみ』 山田太一編、筑摩書房、1995年
- 3) 『リリアン』 山田太一作、黒井健絵、小学館、2006年
- 4) 『異人たちとの夏』 山田太一作、新潮社、1987年、山本周五郎賞・日本文芸大賞受賞。
- 5) 東日本大震災にまつわる怪談を扱った新聞記事には、次のようなものがある。

### ○『朝日新聞』

「切ない思い、姿を変えて」(2012年11月19日夕刊) …僧侶をふくむボランティアの人たちが、仮設住宅で被災者の悩みを聞く活動を行っているが、被災者は大勢の人が亡くなった場所を通ると、何かを見てしまうという。

「新・遠野物語」(2013年8月8日) …文芸評論家東雅夫氏のインタビュー。東氏が仙台の出版社荒蝦夷と組んで始めた「みちのく怪談コンテスト」には、震災後、多くの怪談が寄せられた。

### ○『東京新聞』

「被災地の幽霊話 ほんのり温かく『死と向き合う心に癒やしも』」(2013年8月12日) …「みちのく怪談コンテスト」には、震災後、多くの怪談が寄せられた。荒蝦夷の土方正志氏は、震災の後、怪談の質が大きく変わり、慰霊と鎮魂の思いが込められるようになったという。

### ○『読売新聞』

「怪談、鎮魂と癒やし…流行の背景に東日本大震災」(2014年4月3日) …東日本大震災をきっかけに怪談ブームが起こった。民俗学者小松和彦氏は、震災後、無き人と自分とのつながりを意識したことが背景にあると語った。

### ○『河北新報』

「＜祈りと震災＞(16) 怪談に包み父を恋う」(2015年2月24日) …ブーツの中に入っていた白い花と同じ花が、一週間後に震災で亡くなった父の棺になぜか捧げられていた。父の死を受け入れられず「みちのく怪談コンテスト」に投稿したところ、この体験談が大賞となった。

注記) 本稿は、2015年7月31日に川崎市にて、三浦・馬見塚が山田太一氏にお会いして、直接インタビューした録音を活字におこし、読みやすい形にするため若干の編集を加えたものである。